

川端康成

日漢對照
有聲版

伊豆的舞女
雪國

施小煒 譯

中和出版
OPEN PAGE



目錄

伊豆の踊子 / 002

伊豆的舞女 / 003

《伊豆的舞女》解讀之一例 / 060

雪国 / 068

雪國 / 069

《雪國》閱讀札記五則 / 316

伊豆の踊子

いち
一

道が^{みち}つづら^お折りに^{あまぎとうげ}な^{ちか}って、いよいよ^{おも}天城^{あまぎとうげ}峠^{ちか}に^{おも}近づいたと思^{おも}
う^{あまあし}ころ、雨^{あまあし}脚^{あまあし}が^{すぎ}杉^{みつりん}の^{しろ}密^そ林^そを^{はや}白^{はや}く^{はや}染^{はや}め^{はや}ながら、^{はや}す^{はや}ま^{はや}じ^{はや}い^{はや}早^{はや}さ^{はや}で^{はや}
麓^{ふもと}から^{わたし}私^{わたし}を^お追^おっ^おて^お来^おた。

私^{わたし}は^は二^は十^は歳^は、^{こうとうがっこう}高^{せいぼう}等^{せいぼう}学^{せいぼう}校^{せいぼう}の^{こんがすり}制^{きもの}帽^{はかま}を^{はかま}か^{はかま}ぶ^{はかま}り、^{はかま}紺^{はかま}飛^{はかま}白^{はかま}の^{はかま}着^{はかま}物^{はかま}に^{はかま}袴^{はかま}
を^{はき}は^{はき}き、^{がくせい}学^{がくせい}生^{がくせい}カ^{がくせい}パ^{がくせい}ン^{がくせい}を^{かた}肩^{かた}に^{かた}か^{かた}け^{かた}て^{かた}い^{かた}た。一^{ひとり}人^{ひとり}伊^い豆^いの^い旅^いに^い出^いて^いか
ら^{よつ}四^{よつ}日^{よつ}目^{よつ}の^{よつ}こ^{よつ}と^{よつ}だ^{よつ}つ^{よつ}た。修^{しゆぜん}善^{しゆぜん}寺^{しゆぜん}温^{おんせん}泉^{おんせん}に^い一^{いち}夜^{いち}泊^{いち}り、湯^ゆヶ^が島^{しま}温^{おんせん}泉^{おんせん}に^い
二^に夜^に泊^にり、そ^{あまぎ}し^{あまぎ}て^{あまぎ}、^{のぼ}天^{あまぎ}城^{あまぎ}を^{のぼ}登^{のぼ}っ^{のぼ}て^{のぼ}来^{のぼ}た^{のぼ}の^{のぼ}だ^{のぼ}つ^{のぼ}た。

重^{かさ}な^あり^あ合^あつ^あた^あ山^{やま}々^{やま}や^{げんせいりん}原^{ふか}生^{けいこく}林^{あき}や^み深^とい^と溪^い谷^いの^い秋^いに^い見^い惚^いれ^いな^いが^いら^いも、
私^{わたし}は^{ひと}一^{ひと}つ^{ひと}の^{ひと}期^い待^いに^い胸^{むね}を^いと^いき^いめ^いか^いし^いて^い道^いを^い急^いい^いで^いい^いる^いの^いだ^いつ^いた。

そ^{おおつぶ}う^{あめ}ち^{わたし}に^う大^は粒^はの^う雨^はが^う私^{わたし}を^う打^うち^う始^うめ^うた。折^おれ^お曲^おつ^おた^お急^{きゆう}な^{さかみち}坂^{さかみち}道^{さかみち}
を^か駆^かけ^か登^かつ^かた。よ^{のぼ}う^{のぼ}や^{のぼ}く^{のぼ}峠^{とうげ}の^{きたぐち}北^{ちや}口^やの^{たど}茶^た屋^たに^た辿^たり^たつ^たい^たて^たほ^たつ^たと
す^{どうじ}ると^{わたし}同^{いりぐち}時^たに^た、私^{わたし}は^いそ^いの^い入^い口^いで^い立^いち^いす^いく^いん^いで^いし^いま^いつ^いた。あ^いま^いり^いに^い期^い待^いが^いみ^いご^いと^いに^い的^い中^いし^いた^いか^いら^いで^いあ^いる。そ^いこ^いで^い旅^い芸^い人^いの^い一^い
行^いが^い休^いん^いで^いい^いた^いの^いだ。

突^つっ^つ立^つつ^つて^つい^つる^つ私^{わたし}を^{わたし}見^{わたし}た^{わたし}踊^{おどり}子^こが^{おどり}す^{おどり}ぐ^{おどり}に^{おどり}自^{おどり}分^{おどり}の^{おどり}座^{おどり}蒲^{おどり}団^{おどり}を^{おどり}外^{おどり}し^{おどり}
て^{おどり}、裏^{うらがえ}返^おし^おに^おそば^おへ^お置^おいた。

「ええ……」と^いだ^いけ^い言^いっ^いて^い、私^{わたし}は^{うえ}そ^この^{おろ}上^{おろ}に^{さかみち}腰^{さかみち}を^{さかみち}下^{さかみち}し^{さかみち}た。坂^{さかみち}道^{さかみち}
を^{はし}走^いつ^いた^い息^い切^いれ^いと^い驚^{おどろ}き^{おどろ}と^{おどろ}で^{おどろ}、「あ^いり^いが^いと^いう^い」と^いい^い言^い葉^いが^い咽^いに^い
ひ^いっ^いか^いか^いつ^いて^い出^いな^いか^いつ^いた^いの^いだ。

伊豆的舞女

一

山道彎成了九曲羊腸。眼看就快到天城嶺時，雨腳卻將密密的杉木林染作了一片白茫茫，以驚人的速度從山腳下衝着我直追了上來。

我二十歲，頭戴高等學校的制帽，上着藏青色飛白紋^①外衣，下穿傳統寬鬆肥腿褲，肩頭挎着隻書包。隻身一人出門來伊豆旅行，已是第四天了。在修善寺溫泉住了一宿，湯島溫泉盤桓兩晚，然後足踏朴木高齒屐來爬天城嶺。重巒疊嶂、老樹古林再加上深溪幽壑的秋色，令我目醉神迷，另外還有一個期盼蠱誘得我心波蕩漾，催促着我倉促趕路。不一會兒，大滴的雨點便開始砸在了我身上。我沿着迂曲又陡峭的山徑一路疾奔，總算爬到了嶺頭北口的茶屋前，剛剛才鬆下了一口氣，便又瞠目結舌地僵立在那裡。過於完美地好夢成真——那班子江湖藝人正在這裡休息。

見我呆立着不動，舞女馬上抽出她自己的坐墊，翻了個面，放在旁邊。

「呃……」

我只吐出了這麼一個音節，便坐在那上面。疾奔上坡累得

① 花紋類似書法飛白效果的染法。

踊子と真近に向い合つたので、私はあわてて袂から煙草を取り出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引き寄せて私に近くしてくれた。やっぱり私は黙っていた。

踊子は十七くらいに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。それが卵形の凜々しい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。髪を豊かに誇張して描いた、稗史的な娘の絵姿のような感じだった。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏を着た二十五六の男がいた。

私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。その時は若い女が三人だったが、踊子は太鼓を提げていた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思った。それから湯ヶ島の二日目の夜、宿屋へ流して来た。踊子が玄関の板敷で踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下して一心に見ていた。——あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南に越えて湯ヶ野温泉へ行くのだろう。天城七里の山道できっと追いつけるだろう。そう空想して道を急いで来たのだったが、雨宿りの茶屋でびったり落ち合ったものだから、私はどぎまぎしてしまったのだ。

間もなく、茶店の婆さんが私を別の部屋へ案内してくれた。平常用はないらしく戸障子がなかった。下を覗くと美しい谷が目の届かないほど深かった。私は肌に粟粒を拵え、かちかちと歯を鳴らして身顛いした。茶を入れに来た婆さんに、寒いと言うと、

上氣不接下氣，再加上驚慌，「謝謝」二字便哽在嗓子眼裡，出不來了。

由於近在咫尺與舞女面面對，我慌慌張張，從袖兜裡掏出香煙來。舞女又把女伴面前的煙具盤拉得離我近一點。我仍舊沉默不言。

舞女看上去約莫十七歲，梳着一個我叫不上名字的大大的老式髮髻，形狀奇異。這髮式將她一張端莊的鵝蛋臉襯托得甚是玲瓏小巧，和諧而美麗。感覺就像繡像小說裡畫着的姑娘，頭髮描畫得很誇張，又濃又密。舞女的同伴中有一位四十多歲的女人、兩位年輕女子，此外還有一個二十五六歲的男子，穿着一件長岡溫泉旅館的短外衣。

此前我曾兩次見過舞女她們。第一次是在我來湯島的路上，與前往修善寺的她們在湯川橋附近遇上了。當時是三個年輕女子，舞女拎着個鼓。我幾次三番地回頭望過去，感覺羈心旅情油然而生。然後是在湯島的第二夜，她們來旅館趕場子。舞女在前廳裡跳舞，我坐在樓梯半當中，目不轉睛地盯着看。——那天是在修善寺，今晚在湯島，照這樣子的話，明天大概會向南翻過天城嶺趕到湯野溫泉去的吧。天城五十多里的山路上，肯定能追上他們。我一邊這麼思緒紛飛，一邊匆匆趕路，誰知就在這避雨的茶屋裡劈頭趕上了，我自然不免蹣跚。

沒一會兒，茶館的老婆婆把我領到了另一間屋子裡。這屋子看來平日裡不怎麼用，既沒有拉門也沒有隔扇。俯瞰下方，秀麗的山谷深不見底。我皮膚起粟，牙齒嘎吱嘎吱作響，渾身發顫。我告訴進來沏茶的老婆婆說身上發冷，老婆婆便說道：

「おや、旦那さまお濡れになってるじゃございませんか。こちらでしばらくおあたりなさいまし、さあ、お召物をお乾かしなさいまし」と、手を取るようにして、自分たちの居間へ誘ってくれた。

その部屋は炉が切ってあって、障子を明けると強い火気が流れて来た。私は敷居ぎわに立って躊躇した。水死人のように全身蒼ぶくれの爺さんが炉端にあぐらをかいているのだ。瞳まで黄色く腐ったような眼を物憂げに私のほうへ向けた。身の周りに古手紙や紙袋の山を築いて、その紙屑のなかに埋もれていると言ってもよかった。とうてい生物と思えない山の怪奇を眺めたまま、私は棒立ちになっていた。

「こんなお恥ずかしい姿をお見せいたしました……。でも、うちのじいじでございませうからご心配なさいませう。お見苦しくても、動けないのでございませうから、このままで堪忍してやってくださいまし」

そう断わってから、婆さんが話したところによると、爺さんは長年中風を患って、全身が不随になってしまっているのだそうだ。紙の山は、諸国から中風の養生を教えて来た手紙や、諸国から取り寄せた中風の薬の袋なのである。爺さんは峠を越える旅人から聞いたり、新聞の広告を見たりすると、その一つをも洩らさずに、全国から中風の療法を聞き、売薬を求めたのだそうだ。そして、それらの手紙や紙袋を一つも捨てずに身の周りに置いて眺めながら暮して来たのだそうだ。長年の間にそれが古ぼけた反古の山を築いたのだそうだ。

私は婆さんに答える言葉もなく、囲炉裏の上につつむいていた。山を越える自動車が家を揺すぶった。秋でもこんなに寒い、そして間もなく雪に染まる峠を、なぜこの爺さんは下りないのだろうと考えていた。私の着物から湯気が立って、

「啊呀少爺！您這可是全身都淋濕了呀！請到這邊來烤烤火吧。來來來，把衣服給烘乾嘍。」

說着，她牽着我的手，把我領進他們自己用的內客廳裡去了。

這間屋子裡砌有火塘，一拉開拉門，便有一股強烈的熱氣迎面撲來。我站在門檻邊躊躇不前。只見一個老爺子盤腿坐在火塘邊，渾身青腫，活像一具溺水而亡的屍體，目光憂鬱地朝我看過來，連眼珠子都是黃濁的，彷彿腐爛了一般。在他身子四周，舊信紙和紙袋子堆積成山，說他是掩埋在廢紙堆裡也不為過。望着這個毫無生氣的山間老怪，我呆若木雞，動彈不得。

「太丟人現眼啦，讓您瞧見這副醜態……不過這是我家老爺子，您不必擔心的。儘管看着寒碇，但他已經動彈不了啦。就請您多多擔待了。」

如此交代了一番後，那老婆婆又告訴我說，老爺子長年罹患中風，全身不遂。那座廢紙山，便是各地寄來的中風療養的偏方，以及從各地函購來的裝中風藥的紙口袋。只要是治療中風的藥方，從翻越山嶺而來的過客口中聽到的也好，在報紙廣告上看到的也好，老爺子無一遺漏，全國各地都去信打聽，求購成藥。而且那些來信與紙口袋也一樣不扔掉，全放在身旁，就望着它們打發光陰。年深月久，那些廢紙便堆積成山了。

面對老婆婆，我無言以答，坐在火塘旁垂首不語。越嶺來去的汽車搖撼着房屋。連秋天都這麼冷，過不了多久便會大雪封山，老爺子為何不下山去呢？我心下暗忖道。我的衣服上冒出了水蒸氣，火勢旺得令我腦殼生疼。老婆婆走到了店裡，跟

あたま いた ひ つよ ばあ みせ で たびげいに おんな
頭が痛むほど火が強かった。婆さんは店に出て旅芸人の女と
はな
話していた。

「そうかねえ。この前連れていた子がもうこんなになったの
かい。いい娘あんこになって、お前まえさんもけっこうだよ。こんなに
きれいになったのかねえ。女の子は早いもんだよ」

こいち じかん た たびげいに いで た ものおと きこ
一時間経つと、旅芸人たちが出立つらしい物音が聞えて
きた。私わたしもおちつ着いている場合ばあいではないのだが、胸騒むなさわぎするば
かりで立ち上る勇気ゆうきが出でなかつた。旅馴たびなれたと言いっても女おんなの
足あしだから、十町じゅっちょうや二十町にじゅっちょう後おれたって一走りひとはしに追おいつけると
思おもいながら、炉ろのそばでいらいらしていた。しかし踊子おどりこたち
がそばにいとなくなると、かえって私わたしの空想くうそうは解とき放はなたれたよ
うに生き生きと踊りお始めた。彼らかれらを送り出おくして来た婆さんばあに聞
いた。

「あの芸人げいにんは今夜こんやどこで泊とまるんでしょう」

「あんな者もの、どこで泊とまるやら分わかるものでござございますか、旦那だんな
さま。お客きやくがあればありしだい、どこにだつて泊とまるんでござ
いますよ。今夜こんやの宿やどのあてなんぞござございますものか」

はなはだしい軽蔑けいべつを含ふくんだ婆さんばあの言葉ことばが、それならば、
おどりこ こんや わたし へ や とま おも わたし
踊子おどりこを今夜こんやは私わたしの部屋へやに泊とまらせるのだ、と思おもったほど私わたしを
あお
煽りあお立てた。

あまあし ほそ みね あか き じゅつぶん ま
雨脚あまあしが細ほそくなって、峰みねが明あかるんで来た。もう十分じゅつぶんも待まてば
きれいきれいに晴はれ上ると、しきりに引き止とめられたけれども、じつと
すわ
坐すわっていられなかつた。

「お爺じいさん、おだいじになさいよ。寒さむくなりますからね」と、
わたし ころ い た あが ひ と
私わたしは心こころから言いって立ち上あがつた。爺じいさんは黄色きいろい眼めを重おもそうに
うご
動かかすして微かすかにうなずいた。

「旦那だんなさま、旦那だんなさま」と叫さけびながら婆さんばあが追おっかけて
きた。

那班跑江湖的女藝人聊着閒話。

「真的啊？上次帶着來的姑娘都已經長這麼大啦？生得多秀氣！你也真是好福氣呢。出落得這麼俊俏！女孩子家就是長得快啊。」

過了不到一小時，便傳來了江湖班子動身出發的聲響。雖然我覺得自己也不能這麼優哉優哉的，卻也只是心內忐忑不已，並沒有勇氣站起身來。儘管她們慣常雲遊四方，可左不過是一群女人而已，就算落下個三四里路，只消快跑兩步我就能追上去。我就這麼坐在火塘邊思前想後，焦慮不安。然而一旦舞女們不在近旁，我的空想反倒被解放了出來，開始歡蹦亂跳。我向送走了她們的老婆婆問道：

「那班子藝人今晚住哪兒？」

「那種人，誰知道他們會住哪兒呢，少爺。只要有客人，甭管甚麼地方他們都會住下的。哪裡還有甚麼今晚指定的住處哦。」

老婆婆飽含輕蔑的這番話狠狠地蠱惑了我，我甚至心生邪念：既然如此，今晚就叫那個舞女睡到我的房間裡來吧。

雨腳變細，峰頭明亮了起來。儘管老婆婆再三勸阻，說再等上個十分鐘的話，天就能晴暢快啦。可我說甚麼也坐不住了。

「老爺爺，請多多保重啦。接下去天就要冷起來啦。」

我發自內心地說道，站起身來。老爺子澀滯地轉動着渾濁的眼珠，微微點頭。

「少爺！少爺！」老婆婆邊喊邊追了上來。

「こんなにいただ戴いてはもったいのうもうしわけございます。申訳ござい
ません」

そして私わたしのカバンをだ抱きかかえて渡わたそうとせずに、いくら
断ことわってもその辺へんまで送おくると言いって承しょう知ちしなかった。一町いっちょうば
かりもちよこちよこつきいて来おて、同おじなことをく繰かえかえしていた。

「もったいのうもうしわけございます。お粗末かいたしました。お顔かをよ
く覚おぼえております。今こん度どお通とおりの時ときにお礼れいをいたします。この
次つぎもたちよりきださいまし。お忘わすれはいたしません」

私わたしは五十ごじゅう銭せん銀ぎん貨かを一枚いちまい置おきただけいただったので、痛いたく驚おどろい
て涙なみだがなまだぼれかんんにおどりここにはやくおお
つきたいものだから、婆ばあさんのよろよろあしどした足あし取どりが迷めい惑わくでも
あつた。とうとう峠とうげのトンネルきまで来きてしまつた。

「どうもありがとう。お爺じいさんが一人ひとりだから帰かえって上あげてく
ださい」と私わたしが言いうと、婆ばあさんはやつとのことはなでカバンなを離はな
した。

暗くらいトンネルはいに入つめると、冷しずくたい雫しずくがおぼたおぼた落おちていた。
南みな伊豆なみへの出口いが前方ぜんぽうに小ちいさく明あかるんでいた。

二

トンネルの出口でぐちから白塗しろぬりの柵さくに片側かたがわを縫ぬわれた峠とうげ道みちが稲いな
妻ずまのように流ながれていた。この模も型けいのような展てん望ぼうの裾すそのほうげいに芸いっ
人にんたちの姿すがたがみえた。六町ろくちょうと行いかないうちに私わたしは彼かれらの一いっ
行こうに追おいついた。しかし急きゆうに歩ほ調ちようを緩ゆるめることもできないの
で、私わたしは冷れい淡たんなふうおんに女おんなたちを追おい越こしてしまつた。十間じゅうけん
ほど先さきに一人ひとり歩あるいていた男おとこが私わたしを見みると立たち止どまつた。

「お足あしが早はやいですね。——いい塩梅あんばいに晴はれました」

「您給了這麼多，這太過意不去啦。實在不好意思。」

然後抱着我的書包死活不肯放手，我再三辭讓，她也不答允，說是就送到那邊兒。她一路碎步跟在我身後走了一百來米，絮絮叨叨地反覆說着同樣的話。

「這太過意不去啦。慢待您了。我記牢您的長相啦。下次您再路過時我會報答您的。請您下次一定要來啊！我不會忘記您的！」

我不過就留下了一枚五十錢的銀幣而已，她居然驚喜得幾乎流淚。然而我一心只想着趕快追上舞女，老婆婆的蹣跚步履也令我為難。終於來到了嶺上的隧道前。

「謝謝啦。就老爺爺一個人在家裡，你請回吧。」

我說道。老婆婆這才總算放開了書包。

走進陰暗的隧道，冰冷的水珠滴滴答答地滴落下來。通往南伊豆的出口在前方幽幽地發出光亮。

二

山道如同一道閃電，從隧道口奔流而出，一側鑲着塗成白色的護欄。在這模型一般的景象中，遙遙可見江湖藝人們的身影。還沒走到七百米，我便追上了他們。可是我又不能突兀地放慢腳步，便裝出一副冷淡漠然的神態，超過他們走到前面去了。獨自走在約莫二十米之前的男子看到我，便停住了腳。

「您走得好快。——真是巧得很，天晴啦。」

わたし おとこ なら ある はじ おとこ つ つ
私はほっとして男と並んで歩き始めた。男は次ぎ次ぎに
いろいろなことを私に聞いた。二人が話しだしたのを見て、う
しろから女たちがばたばた走り寄って来た。

おとこ おお やなぎごうり せ お しじゅうおんな こいぬ だ
男は大きい柳行李を背負っていた。四十女は小犬を抱い
ていた。上の娘が風呂敷包、中の娘が柳行李、それぞれ大
きい荷物を持っていた。踊子は太鼓とその杵を負っていた。
しじゅうおんな もつ も おどり こ たい こ お わく お
四十女もぼつぼつ私に話しかけた。

こうとうがっこう がくせい うえ むすめ おどり こ ささや
「高等学校の学生さんよ」と、上の娘が踊子に囁いた。
わたし ふ かえ わら い
私が振り返ると笑いながら言った。

「そうですね。それくらいのことは知っています。島へ学
生さんが来ますもの」

いっこう おおしま は ぶ みなと ひと はる しま で
一行は大島の波浮の港の人たちだった。春に島を出てから
たび つづ さむい ふゆ ようい こ
旅を続けているのだが、寒くなるし、冬の用意はして来ないの
で、下田とおか いとうおんせん しま かえ い
で、下田に十日ほどいて伊東温泉から島へ帰るのだと言った。
おおしま き わたし し かん おどり こ うつく
大島と聞くと私はいっそう詩を感じて、また踊子の美しい
かみ なが おおしま たず
髪を眺めた。大島のことをいろいろ訊ねた。

「学生さんがたくさん泳ぎに来るね」と、踊子が連れのおんなの女
いに言った。

「夏でしょう」と、私わたしが振り向くと、踊子おどりこはどぎまぎして、

「冬でも……」と、小声こごえで答えたように思われた。

「冬でも？」

踊子おどりこはやはり連れおんなの女みを見て笑った。

「冬でも泳げるんですか」と、私わたしがもう一度言いちどいうと、踊子おどりこ
あか ひじょう かお かる
は赤あかくなって、非常ひじょうにまじめな顔かおをしながら軽かるくうなずいた。

「ばかだ。この子こは」と、四十女しじゅうおんなが笑わらった。

我心頭一陣輕鬆，與男子並肩走去。男子接連不斷地向我左打聽右打聽。見我們倆交談開了，女子們便從後面快步趕了上來。

男子背着一個大柳條包。四十女懷裡抱了隻小狗，大姑娘是包袱，二姑娘是柳條包，每人拿着一樣大件行李。舞女則背着鼓和鼓架子。四十女也慢慢地跟我搭起訕來。

「他是高中的學生哦。」

大姑娘對舞女耳語道。見我回頭，又笑着說道：

「對吧？這點事兒我還是曉得的。常有學生哥兒到島上來的。」

這一行是大島波浮港人。她們說，春天裡她們就出島在外跑江湖了，如今天氣漸將變冷，而她們沒有做好越冬準備，打算在下田待上十天左右，就從伊東溫泉啟程回島上去。一聽到大島二字，我益發感到了詩意，又望了望舞女美麗的髮髻，問了許多關於大島的事情。

「有好多學生哥兒來游泳呢。」

舞女對女伴說道。

「那是在夏天吧。」

我扭頭問道。舞女神情慌亂，似乎低聲答了一句：

「冬天也有……」

「冬天也有？」

舞女依舊看着女伴，笑了。

「冬天也能游泳嗎？」

我再次問道。舞女漲紅了臉，神情非常認真，輕輕點了點頭。

「傻樣兒！這孩子。」

四十女笑了。

湯ヶ野までは河津川の溪谷に沿うて三里あまりの下りだった。峠を越えてからは、山や空の色まで南国らしく感じられた。私と男とは絶えず話し続けて、すっかり親しくなった。萩乗や梨本なぞの小さい村里を過ぎて、湯ヶ野の藁屋根が麓に見えるようになったころ、私は下田までいっしょに旅をしたいと思いついて言った。彼は大変喜んだ。

湯ヶ野の木賃宿の前で四十女が、ではお別れ、という顔をした時に、彼は言ってくれた。

「この方はお連れになりたいとおっしゃるんだよ」

「それは、それは。旅は道連れ、世は情。私たちのようなつまらない者でも、ご退屈しのごにはなりますよ。まあ上ってお休みなさいまし」と無造作に答えた。娘たちは一時に私を見たが、至極なんでもないという顔で黙って、少し羞かしそうに私を眺めていた。

皆といっしょに宿屋の二階へ上って荷物を下した。畳や襖も古びて汚なかった。踊子が下から茶を運んで来た。私の前に坐ると、真紅になりながら手をぶるぶる顫わせるので茶碗が茶托から落ちかかり、落すまいと畳に置く拍子に茶をこぼしてしまった。あまりにひどいはいにかみようなので、私はあけにとられた。

「まあ！ 厭らしい。この子は色気づいたんだよ。あれあれ……」と、四十女が呆れ果てたというふうには眉をひそめて手拭を投げた。踊子はそれを拾って、窮屈そうに畳を拭いた。

この意外な言葉で、私はふと自分を省みた。峠の婆さんに煽り立てられた空想がぼきんと折れるのを感じた。

そのうちに突然四十女が、

「書生さんの紺飛白はほんとにいいねえ」と言って、しげしげ私を眺めた。

直到湯野，一路都是沿着河津川的二十多里下山道。翻過山嶺後，連山色和天色都讓人感到了一派南國風韻。我和男子閒聊了一路，變得十分親近。走過了荻乘、梨本等小村莊，山腳下湯野的稻草屋頂便映入了眼簾。這時，我決然地開口說道，要同她們作伴一道走到下田。男子非常開心。

在湯野的廉價客棧前，四十女臉上作出告別的表情時，男子便代我說道：

「這位先生說想跟我們結伴兒呢。」

「喲，那敢情好。出門靠旅伴，處世看情分嘛。就算我們這種不足掛齒的角色，也能給您解解悶兒呢。請，請，進來歇一歇。」

她不以為意地答道。姑娘們齊齊地看了我一眼，作出毫不在意的神情，一聲不響，略顯羞怯地望着我。

我同眾人一道登上客棧二樓，放下了行李。榻榻米與隔扇既舊且髒。舞女從樓下端了茶來，在我面前跪坐下，滿面漲紅，兩手顫抖不已，茶碗差點兒要從托盞裡掉落下來。為了不讓它掉下來，舞女趕緊將它放到了榻榻米上，這下茶水卻灑了出來。那副嬌羞萬千的憨態，看得我目瞪口呆。

「啊喲！壞啦。這孩子情竇已開了。啊呀啊呀……」

四十女驚訝萬分地緊蹙眉頭，把手巾扔了過來。舞女拾起手巾，縮手縮腳地擦拭着榻榻米。

這番出乎意料的話，讓我倏然反思起自己來。被嶺上那位老婆婆蠱惑起來的非分之想，似乎嘎巴一聲，折斷了。

過了一會兒，四十女突然說道：

「這位書生身上這件藏青飛白紋上衣，可真是好東西啊。」

她目不轉睛地端詳着我。

「この方の飛白は民次と同じ柄だね。ね、そうだね。同じ柄じゃないかね」

かたわらの女に幾度もだめを押してから私に言った。

「国に学校ゆきの子供を残してあるんですが、その子を今思ひ出しましてね。その子の飛白と同じなんですもの。この節は紺飛白もお高くてほんとに困ってしまう」

「どこの学校です」

「尋常五年なんです」

「へえ、尋常五年とはどうも……」

「甲府の学校へ行ってるんでございますよ。長く大島におりますけれど、国は甲斐の甲府でございましてね」

一時間ほど休んでから、男が私を別の温泉宿へ案内してくれた。それまでは私も芸人たちと同じ木賃宿に泊ることとばかり思っていたのだった。私たちは街道から石ころ路や石段を一町ばかり下りて、小川のほとりにある共同湯の横の橋を渡った。橋の向うは温泉宿の庭だった。

その内湯につかっていると、後から男がはいって来た。自分が二十四になることや、女房が二度とも流産と早産とで子供を死なせたことなどを話した。彼は長岡温泉の印半纏を着ているので、長岡の人間だと私は思っていたのだった。また顔つきも話ぶりも相当知識的なところから、物好きか芸人の娘に惚れたかで、荷物を持ってやりながらついて来ているのだと想像していた。

湯から上ると私はすぐに昼飯を食べた。湯ヶ島を朝の八時に出たのだったが、その時はまだ三時前だった。

男が帰りがけに、庭から私を見上げて挨拶をした。

「これで柿でもおあがりなさい。二階から失礼」と言って、私は金包みを投げた。男は断わって行き過ぎようとしたが、

「這身飛白紋，花紋跟民次的一模一樣呢。喏，對不？花紋不是一樣嗎？」

她反覆向身旁的女子確認了好幾遍，然後對我說：

「把個上學的孩子放在老家，剛才我想起那孩子啦。您這件，跟那孩子的飛白紋一模一樣。這陣子飛白紋好貴好貴的，真叫人犯難。」

「他上的甚麼學校？」

「普通小學，五年級。」

「哦，普通小學五年級啦。呃……」

「他是在甲府上小學啦。我們長年住在大島，可老家是在甲斐的甲府呢。」

休息了約莫一個小時，男子將我領到了另外一家溫泉旅館。在此之前我還一直以為會跟藝人們住在同一家廉價客棧裡。我們從大道往下走，走過石子路和石階，走了約莫一百米後，走過小河邊公共浴場旁的一座橋，對面便是溫泉旅館的院子。

我泡在室內溫泉裡，男子跟了進來。告訴我說他二十四了，老婆兩次懷孕，一次流產一次早產，胎兒都死了。見他身穿長岡溫泉的短上衣，我一直以為他是長岡人。又見他長相言談都好像相當有知識，便猜測他大概不是出於偏好就是迷戀上了女戲子，於是才追隨身後幫着扛行李，四處流浪的。

泡完了澡，我馬上就吃了午飯。早晨八點離開湯島的，這時候還不到三點。

男子臨回去時，站在院子裡抬眼看着我道別。

「用它買點兒柿子吃吧。從二樓扔下去，失禮啦。」

說着，我將一小包錢扔了過去。男子辭謝不受，打算繞過

にわ かみづつ お ひ かえ ひろ
庭に紙包みが落ちたままなので、引き返してそれを拾うと、

「こんなことをなさっちゃいけません」と抛り上げた。それが藁屋根の上に落ちた。私もう一度投げると、男は持って帰った。

夕暮からひどい雨になった。山々の姿が遠近を失って白く染まり、前の小川が見る見る黄色く濁って音を高めた。こんな雨では踊子たちが流して来ることもあるまいと思ひながら、私はじっと坐っていられないので二度も三度も湯にはいってみたりしていた。部屋はうす暗かった。隣室との間の襖を四角く切り抜いたところに鴨居から電燈が下っていて、一つの明りが二室兼用になっているのだった。

ととんととん、激しい雨の音の遠くに太鼓の響きが微妙に生まれた。私は掻き破るように雨戸を明けて体を乗り出した。太鼓の音が近づいて来るようだ。雨風が私の頭を叩いた。私は眼を閉じて耳を澄ましながら、太鼓がどこをどう歩いてここへ来るかを知ろうとした。間もなく三味線の音が聞えた。女の長い叫び声が聞えた。賑かな笑い声が聞えた。そして芸人たちは木賃宿と向い合った料理屋のお座敷に呼ばれているのだと分った。二三人の女の声と三四人の男の声とが聞き分けられた。そこがすめばこちらへ流して来るのだろうと待っていた。しかしその酒宴は陽気を越えてばか騒ぎになって行くらしい。女の金切声がときどき稲妻のように闇夜に鋭く通った。私は神経を尖らせて、いつまでも戸を明けたままじっと坐っていた。太鼓の音が聞えるたびに胸がほうと明るんだ。

「ああ、踊子はまだ宴席に坐っていたのだ。坐って太鼓を打っているのだ」

太鼓が止むとたまらなかつた。雨の音の底に私は沈み込ん

去，見紙包安安靜靜地落在院子裡，便又轉身折回，把它拾了起來，口中說着：

「您不能這麼做。」

回扔了上來，落在了稻草屋頂上。我又一次扔了下去，這下男子拿着回去了。

從傍晚開始，下起了一場暴雨。群山染作了白茫茫一片，山影失去了層次感。近前的小河眼見之間變得黃煞煞的，渾濁了起來，水聲轟鳴。如此大雨，舞女們只怕不會串街趕場子了吧，我心裡忖道。我坐也不是站也不是，一而再再而三地去溫泉裡泡澡。屋子裡暗暗幽幽的，與鄰室之間的隔扇上面方方正正地挖了個洞，從門楣上吊了盞電燈下來。這一盞燈供兩間屋子合用。

咚咚咚咚咚，從雨聲狂作的遠處依稀傳來了鼓聲。我魯莽地一把拽開遮雨窗板，探出身去。鼓聲似乎漸漸抵近了。疾風驟雨擊打着我的腦袋，我閉目細聽，想知道那隻鼓是走過何處、如何走向這裡來的。不多時，傳來了三弦琴聲，傳來了女人長長的吆喝聲，傳來了喧鬧的嬉笑聲。於是我明白了，藝人們是被召喚到廉價客棧對面的酒店裡陪客去了。可以聽得出兩三個女人聲和三四個男人聲。我盼望着那邊結束後，她們會到這邊來趕場子。哪知那場酒宴卻越來越火爆，似乎要演化成一場大混亂。女人的尖叫聲彷彿一道道閃電，時不時地劃破黑暗的夜空。我繃緊神經，始終門窗洞開，久久地呆坐不動。每當鼓聲傳來，心裡就忽地一陣敞亮。

「啊，啊！那舞女還在酒席上坐着呢！在坐着敲鼓呢！」

鼓聲一停，我便心焦難耐，整個人沉溺到了雨聲的底處。

でしまった。

やがて、皆が追っかけっこをしているのか、踊り廻っているのか、乱れた足音がしばらく続いた。そして、ぴたと静まり返ってしまった。私は眼を光らせた。この静けさが何であるかを闇を通して見ようとした。踊子の今夜が汚れるのであるかと悩ましかった。

雨戸を閉じて床にはいっても胸が苦しかった。また湯にはいった。湯を荒々しく掻き廻した。雨が上って、月が出た。雨に洗われた秋の夜が冴え冴えと明るんだ。跣で湯殿を抜け出して行ったって、どうともできないのだと思った。二時を過ぎていた。

さん
二

翌る朝の九時過ぎに、もう男が私の宿に訪ねて来た。起きたばかりの私は彼を誘って湯に行った。美しく晴れ渡った南伊豆の小春日和で、水かさの増した小川が湯殿の下に暖かく日を受けていた。自分にも昨夜の悩ましさが夢のように感じられるのだったが、私は男に言ってみた。

「昨夜はだいぶ遅くまで賑かでしたね」

「なあに。聞えましたか」

「聞えましたとも」

「この土地の人なんですよ。土地の人はばか騒ぎをするばかりで、どうもおもしろくありません」

彼があまりに何げないふうなので、私は黙ってしまった。

「向うのお湯にあいつらが来ています。——ほれ、こちらを見つけたと見えて笑っていやがる」

過了一會兒，不知道他們是在玩捉人遊戲還是在滿場跳舞，混亂的腳步聲持續了好一陣子。然後，突然變得闐然無聲了。我瞪大了眼睛，想透過黑暗，看清這片寂靜究竟是甚麼。那舞女的今夜會不會被玷污？我心煩慮亂。

我關上遮雨窗板，躺進了被窩裡，可內心仍舊苦楚不堪，便又去泡在溫泉裡，狂躁地劃拉着熱水。雨停了，月亮出來了。被雨水洗滌過的秋夜皎潔明亮。我心想，就算光着腳溜出澡堂趕過去，也無非是徒勞無益罷了。已經過了兩點了。

三

次日早晨九點多鐘，男子就到旅館來看我了。我剛剛起床，便邀他一道去泡溫泉。晴空萬里、美不可喻的南伊豆是小陽春天氣，水位上漲的小河在澡堂子的下方沐浴着和煦的陽光。昨夜的煩惱苦悶，連自己都覺得恍若夢境。我對男子說道：

「昨天夜裡鬧到很晚嘛。」

「怎麼？您都聽見啦？」

「當然聽見了。」

「是本地人嘛。本地人就會瞎胡鬧，着實沒啥意思。」

見他似乎根本就沒當回事，我便不再言語了。

「她們來了，就在對面的澡堂子裡。——您瞧，好像看到我們啦，正在笑呢。」